

その二 知床

戦後の日本は奇跡的な復興を遂げた。わずか二十三年で、つまり大阪万国博覧会開催の二年前にGDPが世界二位になった。ところが経済は「生き物」。キメの粗い「いびつ」な成長をした結果、細胞に「ひずみ」が生じて公害に代表される様々な深刻な問題が顕在化した。

俺もそうだった。大学受験前に夏子と知り合った。彼女との恋がやる気を奮起させたけれど急速な心の接近がひずみをもたらした。半分は俺の責任かも知れないが「ハロー」と声をかけてきて「グッバイ」と去った夏子。この落差が俺を奈落の底へ落とした。

なんて、まあ、日本経済の矛盾と失恋を結びつけるのは、こじつけ。

今、非常にさわやかな気持ちで知床に向かう。北海道の気候と風土が手を取り合って、夏である事を忘れさせる涼風がとても気持ちいい。そのさわやかさが俺の心の中を吹き抜けて喋る。「おなか、ペコペコ、死にそう」

運転は俺。守は後ろの真ん中の席で、両手に花状態で上町と下村と談笑する。話題豊富で心地よい語り口で誰からも好かれる。東山は助手席に座るが後ろ向きで喋る方が多い。まあ、運転しているからいいが守には大阪弁で喋らない。車は知床半島の根元の町「斜里」を走る。「今日は日曜。開いてる店、あるんやろか」

数少ない信号に引つかかる。その交差点の先に暖簾ノレンが掛かっている店が……東山が叫ぶ。

「あそこ、あそこ！ やってる！ 大衆食堂『知床』」

信号が青になったので店の前で車を止める。すぐ東山が飛び出す。

「ウチ、ドンブリ丼、食べる」

「俺も！ 注文しといて」

「了解！」

背中が返事する。一方、車を降りながら守キリが上町に助言する。

「ここで電話借りて、ユースホテルの予約をキャンセルしておいたら。それに弁当を確保しよう」

さすが守キリの行き届いた配慮。俺とは違う。

「うん。そうする」

上町は手帳を取り出してページをめくる。

*

知床五湖を観光してから知床林道を奥へと進む。真つ青な空の端っこを走る林道は狭い地道。オホーツク海が荒々しい波と途切れない強風を半島に送り出す。いくら走ってもテントを張れる場所がない。夏なのに冬みたいだ。

無線機を積んでいるが、バンパーに取り付けたアンテナが進行方向に関係なくたわむ。まさ

その二 知床

しく知床は地の果てだ。斜里を出るとき地元のアマチュア無線家と交信したが、ここから先、無線局はないと言われた。

一時間は走った。湯気が上がる幅二、三メートルの川を見つめる。橋の下を滝となって海に落ちていく。

「すごい！」

橋から滝を見下ろす。吹き上げられる風は強いが冷たくはない。山側を見ると岸をつたって上れそうだ。テントを張れるかも知れない。横を見ると東山はジーンパンの裾を膝までまくっている。山の日暮れは早いからサーチライトとタオルを配る。念の為に万能ナイフを持つ。

「格好エエ。探検隊や」

先頭は東山で、少し上った所で靴を脱ぐと平な岩に腰掛けて「温い」と川に足を入れて戯れる。俺も隣で足を突っ込む。

「気持ちエエなあ。名前は？」

俺の掌に文字を書く。

「わかる？ 美英子」

「『恵』じゃなく英語の『英』か。字は違うけど死んだ母ちゃんと同じ名前や」

「いつ死にはったん？」

「三つの時。『三恵子』って書くんや。三女やったから」

靴を履いて並んで再び川を上り始める。

「ふーん……」

東山、いや美英子は一旦言葉を切つてから明るい表情に切り変える。

「昔の人つていい加減な名付けするんよね。ウチの父方の兄弟なんか、一郎、二郎、三郎……
四郎……あれ？ 変な……クサイ……」

美英子が鼻をつまんで首を横に振る。

「ウチ、やつてへんで」

「硫黄や」

岸辺のところどころに黄色い粉が付着している。

「見た事、ある。何の実験か忘れたけど理科の……アツッ」

美英子が飛び上がる。どうやら熱水だまりに踏み込んだようだ。

「ここ、ここ、冷たい。早う、冷やし」

美英子は指さした水たまりに足を浸ける。俺は振り返って大声を出す。

「熱水が噴き出している。気をつける！」

美英子が足を気にする。

「どうや？」

「うん。アリガト」

その二 知床

川の流が速くなって大きな岩が目立つ。上るのに精一杯の美英子は「フーフー」と息を吐くだけ。硫黄の臭いはますます強く水蒸気が不気味に白い裸身を変化させる。そんな白いベールの中に小さな滝が現れる。落差は二メートルほど。滝壺はほどよい湯船のよう。一緒に近寄って腕をまくと浸けてみる。少し熱めだが混ぜれば何とかなりそう。すぐ美英子が超元気な声を上げる。

*

「お風呂屋さん、発見！」

俺も振り向いて叫ぶ。

「野湯ノユや！」

すると美英子が俺を睨む。

「一番風呂はウチ！」

「一緒に入るか？」

「イヤ！」

「エエやん！」

「イヤやて。昔から言うやん。裸、見られたら、その人と結婚せなあかんで」

「ほんだら、お先に！」

構わず上着やズボンを脱ぐ。そしてパンツも。

「ヤメテ！」

美英子が背を向ける。ザンブとばかり飛び込む。飛沫が彼女を襲う。

「やったわね！」

足元の石を拾って投げようとする。

「見たなー」

振り上げた腕を降ろしてキョトンとする。

「昔から言うやろ。裸、見られたら、その女と結婚せなあかんって」

「絶対、せーへん！」

*

滝壺から「キャッ、キャッ」という声が聞こえてくる。俺たちは少し下で待機する。

「ここで、テント、張るの、無理やな」

「せやな」

「ところで……」

摩周湖の展望台で夏子と会った事を話す。しかし、これと言った反応がない。

「まさか、あんなところで会うとは。一発ドツイといたらと後悔してんねんけどなあ」

守は黙っている。なんでも話せる仲だ。当然夏子との失恋は知っている。

「一緒に万博へ行こうと約束したのになんで摩周湖で会わなあかんねん……お前、聞いてんの

その二 知床

か」

「クシヨン」

「湯冷めしたんか」

「わからん」

両手でメガフォンを作って叫ぶ。

「オーイ、早う上がれ。湯冷めする！」

美英子の声が返ってくる。

「服着てるとこ。こつちに來たらぶつ飛ばすわよ」

「わかった。わかった。とにかく急げ！」

そんな俺に守が囁く。

「東山さん。いい子やな。モノにしるよ」

笑つてるように見える守。

「せやな。なにか憎めんなあ」

「サツパリしてて……ハックシヨン！」

そのとき丸い光が飛んで來る。いつの間にか薄暗くなっていた。

「お待たせ」

「車に戻つて、テント、張れるとこ探さんと……」

車まで戻ってきた。ルームライトに照らされた美英子の色つぼさが俺を魅了する。長い髪を頭の後ろで束ねて歩き疲れた顔になんとも言えない艶ツヤを感じる。それは一瞬でドアが閉まると幻のように消えた。なんとも言えない大人顔だった。

往きは俺が運転したから帰りは守キリに任せる。アイスボックスから缶ビールを取り出して一気に飲む。守キリは「陰謀だ」と言いながら方向転換して斜里町を目指す。

「せつかく、さっぱりしたのに。ウチらも飲むか。半分こ……三分の一ずつ……」

上町らを誘って美英子が真つ先にビールを飲み出す。

「寒くないか」

守キリがヒーターを入れる。

「お前、風邪ひいたんと違うか」

「そうかも。ティッシュ、くれ」

「止めろ。運転代わる」

「飲んでから言うな！」

滅多に大声を出さない守キリだが、意外ときつかった。

「大丈夫や。こんな道でスピード、出されへんし、お巡りさんはおれへん」

「僕らだけやったら、エエけど……」

*

その二 知床

確かに美英子たちが同乗しているから、いい加減な事をしない方がいい。

「わかった」

運転免許を持っているのは上町だけだった。かと言って上町に運転させるわけにはいかない。ティッシュを数枚手渡す。車を止めて守が鼻をかむ。

「大丈夫？」

女たちが心配する。ダッシュボードの中から薬袋を取りだしてボードランプで探すが胃腸薬と赤チンとかゆみ止めしかなかった。夏だから当然だ。

「誰か、風邪薬持って……ないやろな？」

「胃腸薬か鎮痛剤やったら」

「鎮痛剤で誤魔化すか」

いつの間にか風が収まっている。

「何とかなりそうや。適当なところでテント張ってビール飲んで寝るか」

守はクシャミで応えるだけ。美英子はリュックからカーデイガン^{モリ}を俺に渡す。

「掛けてあげて」

*

知床は風の半島。風は戦^{イシザ}の象徴。海沿いなのに潮の匂いはなく波の音も聞こえない今、山が海に打ち勝っているが、戦いは俺たちを不気味な音と音を伴わない冷気で巻き込む。

その二 知床

テントの奥で俺の寝袋で眠る守。守のダブルサイズの寝袋——なぜ二人用を用意したのか知らないが上町と下村が入っている。ふたつの寝袋の間で着られるもの（美英子はカーディガンを返して貰っていた）をすべて着込んだ俺と美英子は一枚の毛布を分け合う。と言うより美英子が独占する。

五人用のテントに正直五人いるから寝返りできないほど窮屈。しかもテントは粗悪品で入り口のファスナーが途中までしか閉まらない。外気が遠慮なく侵入する。しばらく我慢できたが寒さで眠れない。

甘かった。野湯を無視して知床五湖か斜里まで戻ってテントを張れば良かった。あるいは予算オーバーでもいいからホテルにでも宿泊すべきだった。

「東山さん」

「……」

もう一度呼んでから吐息から頬と思われるところを軽く突く。

「ウウ……ン」

「美英子、ゴメン」

初めて名前を呼ぶ。

「ナニ……」とうわついた返事。

「寒い……抱かせてくれへんか」

その二 知床

「ウ、ウン」

どっちつかずの返事後、美英子は俺の方に身体を向けて首の下へ侵入する俺の左腕に頭を載せる。そして左手を背中に回して俺を抱く。俺も右手を背中へと回す。毛布を俺の方へずらしながら左手を背中から右足の後側へと降ろしていく。

「冷たい」

小声だがはっきりした口調で続ける。

「代わったげる」

美英子の方から身体を密着してくる。俺は覆い被さるようにして乗り越えた。今度は右腕を首の下に入れて、左手で毛布を彼女の身体の下に挟み込ませてから抱いた。彼女も右手で俺の左肩を抱きかかえて足を絡ませてくる。

「冷たくていい気持ち」

意外にも美英子の身体は熱く頬は火照ホテっていた。ふたつの身体がひとつの毛布の中に収まる。「寒かったら言うて。替わるから」

「うん」

吐息がすぐそばにある。でも温かさを得た身体はすぐ睡魔に襲われる。初対面でキレイな女子を抱いたという高揚感は温もりですぐ蒸発した。

*

その二 知床

網走で札幌行きの特急に接続する列車に間に合わすべく斜里駅に向かった。しかし、ほんの数分違いで美英子らは乗り遅れた。その列車を追いかけるために、線路と並行する国道を網走に向けて車を走らせる。順番から言って運転は俺。守は助手席に座らずに気を遣ってか美英子を座らせて後部座席に座る。その美英子が目を細めて指さす。

「あれっ！」

右前方に黒い煙が見える。

「汽車や！ 汽車に乗れるなんて、ついてる！」

減速する汽車を追い超す。前方に駆らしきものが見える。「原生花園駅」と書かれた巨大な看板がある。

「あれが駅？」

看板倒れの小さな駅。枕木を積み上げた二十メートルほどのプラットホームがあるだけ。直接ホームに横付けして急いでリュックを降ろす。

「いろいろ、ありがとうございます」

上町や下村が守に礼を言っている間に俺は美英子に会社の名刺を渡す。

「大阪で会おう。電話、教えて」

美英子は悪戯っぽい微笑みを浮かべる。

「アリガト。滅茶苦茶、楽しかった。会社に電話してもいいん？」

汽笛を鳴らし白い蒸気を吐きながら汽車が近づいてくる。

「うん。それで番号は？」

キキーンと音をたてて汽車はホームを通過して止まる。悪戯っぽさを消してから先ほどま
つたく違う笑顔で俺を見つめる。

「大阪でも会いたいわ」

客車一両で一杯のホームに降りる人はない。

「じゃーね」

上町、下村に続いて美英子が乗り込む。すぐ汽車は発車した。デッキの美英子に投げキッス
を送る。美英子も満面の笑顔で送り返してくる。

「追いかけてようぜ」

車に戻りカメラに望遠ズームレンズを取り付けて車上のキャリアに登る。

「行くぞ！」

国道に戻って三両編成の汽車を追いかける。腹ばいになってカメラを構える俺に美英子たち
が手を振る。機関士も振ってくれる。ズームアップしてシャッターを押す。気分が最高潮に達
した時、急に車が減速し、もう少しのところまでキャリアから落ちそうになる。

窓から守^{キリ}が顔を出して叫ぶ。

「ガス欠や！」

その二 知床

車は止まり、
汽車は煙を残して俺たちを置いてきぼりにする。